

## 序文

本書はサイエンスコミュニケーション講座から学ぶ、科学が本当に「伝わる」技法をまとめたものである。

科学を社会に伝える技法、特にコミュニケーションを通して科学を社会になく活動をサイエンスコミュニケーションと呼ぶ。「科学を分かりやすく伝えたい」、「自分の専門分野を応援してほしい…」という今のあなたの目的は、サイエンスコミュニケーションを学ぶと一歩前に進むかもしれない。

サイエンスコミュニケーションなんて便利な技法があるんだったら「もっと早く教えてほしかった！」とおもった方もおられるだろう。実は教えている。サイエンスコミュニケーションが本格的に日本に広まったのは2005年頃からで、日本の大学、博物館、研究所でサイエンスコミュニケーションの講座は開講されている。ただサイエンスコミュニケーションを学んでもその先のキャリアが不透明だったり、大学院生など研究に携わる一部の人の素養というイメージが強く、なかなか一般に広まることがなかった。

北海道大学では、2005年にサイエンスコミュニケーション講座を開講した。その講座、そして開講する組織をCoSTEP (Communication in Science & Technology Education & Research Program)と呼ぶ。多くの大学ではサイエンスコミュニケーションを大学院生のための副専攻として開講したが、CoSTEPだけは学生と一般の人がともに学べるように教育プログラムを学外に開いた。それはサイエンスコミュニケーションが学術の場に閉じないように、多様な立場のサイエンスコミュニケーターを育成していく必要があると考えたからだ。研究者、ジャーナリスト、起業家、アーティスト、デザイナー、政治家、漫画家、企業の広報担当者、会社員、学芸員、公務員、フリーのサイエンスコミュニケーター、社会活動家など、社会のあらゆる立場の人々がCoSTEPに集い、CoSTEPで学んでいる。そしてこの多様性こそ、柔らかく、しなやかにCoSTEPが持続してきたゆえんだ。現在、CoSTEPの修了生は1,400名以上、日本最大のサイエンスコミュニケーション講座になっている。

本書では北海道大学CoSTEPがこの20年間で培ってきた知見や経験を活かし、サイエンスコミュニケーションの観点、理論、実践事例を整理した。整理してみ

ると、サイエンスコミュニケーションとは科学を伝えるだけではないことが分かってきた。現代は科学の知見だけで問題が解決するほど単純でもないし、科学者だけが科学と社会の問題に対処しなければならないわけでもない。例えば最先端の科学技術である生成AIは企業が実装し、瞬く間に社会に広がった。運用におけるルールはどうするのか？何か問題が起こった時に誰が責任を取るのか？これは科学と社会におけるテーマだが、科学を伝えるだけでは解決しない課題である。伝えた先にどのようなコミュニケーションが必要なのか。本書では、今一度、読者とともにどのようなコミュニケーションが、科学と社会の間に横たわる問題を解決していくのかを考えていく。

本書はサイエンスコミュニケーションに初めて触れた読者にとっても分かりやすいように、サイエンスコミュニケーションを学ぶ旅の形式をとっている。まず序章では自分は何のためにサイエンスコミュニケーションをするのか、4つの目的地から旅のゴールを決めていこう。第1章では、旅の出発前に科学とコミュニケーションを俯瞰的に学んで自分の立ち位置を確認する。第2章ではあなたがこの本を手にしたきっかけである「伝える」サイエンスコミュニケーションについて学んでいく。第3章では「伝える」だけでは到達できない、関心や受容を「育む」サイエンスコミュニケーションを紹介する。第4章では科学の活動自体を社会とともに「省みる」サイエンスコミュニケーションについて述べていく。そして第5章ではサイエンスコミュニケーションをあなた一人の旅にしない、「つなぐ」サイエンスコミュニケーションを取り扱っていく。最後に旅の終章としてサイエンスコミュニケーションを实践するうえでの指針となるよう「CoSTEP宣言」や、各章を横断的に振りかえる座談会を掲載した。「CoSTEP宣言」は、多様な人材が集まるCoSTEPの強みを活かして、20周年を機にサイエンスコミュニケーター100名以上が集合して策定した心得である。

さあサイエンスコミュニケーションの旅へ、出発しよう。

2025年12月

執筆者を代表して  
奥本素子、種村 剛